

現代日本小説大系

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第二十三卷

河出書房版

現日代小本說大系 第二十三卷

昭和二十五年二月二十七日
昭和二十七年十二月二十日
初版發行
再版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

著者代表

武者小路實篤

發行者

河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

日本近代文學研究會

編集者

荒正人

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

印刷者

井關好彦

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

電話 神田 四三二七

目次

武者小路實篤

お目出たき人	四
彼が三十の時	四三
友情	一八四
土地	二五四
へんな原稿	二七三
ユダの辯解	二九九
ヨハネ、ユダの辯解を聞いて	三〇五
ベルシヤ人	三〇八
友の話	三一五
解説（荒 正人）	三九

武者小路實篤

お目出たき人

彼が三十の時

友情

土地

へんな原稿

ユダ

の辯解

ヨハネ、ユダの辯解を

聞いて

ペルシヤ人

友の話

お目出たき人^{ひと}

一

一月二十九日の朝、丸善に行つていろ／＼の本を搜した末、ムンチと云ふ人の書いた「文明と教育」と云ふ本を買つて丸善を出た。出て右に曲つて少し來て四つ角の所へ來た時、右に折れようか、眞直ぐ行かうかと思ひながら一寸右の道を見る。二三千間先に美しい華かな着物を着た若い二人の女が立ちどまつて誰か待つてゐるやうだつた。自分の足は右に向いた。その時自分はその女を藝者だらうと思つた。白粉を濃くぬつた圓い顔した、華かな着物を着てゐる女を見ると自分は藝者にきめてしまふ。

二人とも美しくはなかつた。しかし醜い女でもなかつた。肉づきのいい一寸愛嬌のある顔をしてゐた。殊に一人の方は可愛いゝ所があつた。

自分は二人のゐる所を過ぎる時に一寸何げなくそつちを

見た。さうしてその時心のなかで云つた。

自分は女に餓ゑてゐる。

誠に自分は女に餓ゑてゐる。残念ながら美しい女、若い女に餓ゑてゐる。七年前に自分の十九歳の時戀してゐた月子さんが故郷に歸つた以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓ゑてゐる。

自分は早足で堀にぶつかつて電車道について左に折れて電車にのらうに日比谷にゆき日比谷公園をぬけて自家に向つた。

日比谷をぬける時、若い夫婦の樂しさうに話してゐるのにあつた。自分は心私ひそかに彼等の幸福を祝するよりも羨ましく思つた。羨ましく思ふより呪つた。その氣持は貧者が富者に對する氣持と同じではないかと思つた。淋しい自分の心の調べの華かなる調子で亂される時に、その亂すものを呪はないではゐられない。彼等は自分に自分の淋しさを面のあたりに知らせる、痛切に感じさせる。自分の失戀の舊傷をいためる。

自分は彼等を祝しようと思ふ、しかし面前に見る時やゝもすると呪ひたくなる。

自分は女に餓ゑてゐるのだ。

自分は鶴のことを考へながら自家に歸つた。

鶴は自家の近處に住んでゐた美しい優しい可憐な女である。自分は鶴と話したことはない。月子さんがまだ東京にゐた時分から自分は鶴を知つてゐた。その時分は勿論戀してはゐなかつたが可愛いゝ子供だと思つてゐた。逢ふ度にいゝ感じがして何時でも逢つた暫くは鶴のことを思つてゐた。しかしすぐ忘れてしまつてゐた。處が月子さんが故郷に歸つてから三年目失戀の苦がうすらぐと共に鶴が益々可憐に見え、可愛らしく見え、鶴に逢はない時は淋しくなつた。

自分はその時分から鶴と夫婦になりたく思ふやうになつた。鶴程自分の妻に向く人はないやうに思はれて來た。自分の個性をまげずに鶴とならば夫婦になれるやうに思はれて來た。かくて自分の憧れてゐる理想の妻として鶴は自分の目に映ずるやうになつた。

女に餓えてゐる自分はこゝに對象を得た、その後益々鶴を愛するやうになり、戀するやうになつた。さうして自分の妻になることが鶴にとつても幸福のやうに思へて來た。自分が鶴と夫婦になりたいと思つた時に先づ心配したの

は近處の人に冷笑されることだつた。話の種にされることであつた。歩く度に後ろ指をさゝれることであつた。しかし自分はそんなことを顧慮して自分と鶴の幸福を捨てるのは馬鹿氣てゐると思つた。意氣地のない話と思つ

た。自分は斷じて近處の人を恐れないで見せる。自分は近處の人、口さがなき俵屋の女房かみいん、のらくらしてゐる書生、出入りの八百屋、いたづら小僧、さう云ふ人に後指をさゝれたり、惡口云はれたり、嘲笑されたりすることを平然として甘受して見せようと思つた。

次ぎに自分は母を恐れた。母は世間を恐れる人だ、近處の物笑ひになることは母には耐へがたいことだ。しかし自分を愛する母は自分の決心一つでどうでもなると思つた。

母さへ味方にすれば世間を馬鹿にしてゐる父は承知するだらうと思つた。

かくて自分は鶴を妻にするために出来るだけ骨折らうと思つた。翌年のくれに母を承知させ、その翌年の春に父を承知させ、その夏、間に人をたてゝ鶴の自家に求婚してゐらふことになつた。

自分は其處まで思つたより容易に事が運んだので、十が九までうまくゆくと思つてゐた。その内には自分の家の彼女の家よりもすべての點に於て優つてゐると云ふ自覺も手傳つてゐた。さうして自分はうまくゆく暇を考へて、嬉しき夢と、甘き夢と、くすぐつたい夢を見てゐた。

始めて逢ふ時のこと、お互に感じてゐたことをうちあける時のこと、最初の接吻の時のこと……そんなことさへ空想することがあつた。友のする風評、近處の人の風評も想

像して見た。父や母や兄や姉や姪に對する鶴の態度も想像して見た。すべての想像は華かな、明るい、甘い、さうしてまばゆい氣まりのわるいものであつた。

間に立つた人は七月の下旬に鶴の家に行つて下さつた。さうして無愛想に「何しろまだ若いのですから、今からそんな話にのりたくありません」とことわられてしまつた。此方の名を云はなかつたのが、せめてものまうけものにして、自分はそのことがあつてからも二度目に鶴に逢つた時は、以前と同じ程度に圖々しく鶴の顔を見る事が出来た。

その年の秋、鶴の一家は自分の家の近處から、一里程はなれた所に引越してしまつた。引越された當座は何だか自分が求婚したのが氣がついて、不快に思つて引越して行つたやうな氣がして淋しかつた。又彼女に逢ふ機會の少ないのが淋しかつた。自分は氣まりのわるい思ひをして翌年の三月迄毎月一度ぐらゐ何氣なく彼女の學校の歸りに逢ひに行つた。逢へない時には毎週一度ぐらゐ逢ひに出かけることもあつた。しかしそれ以上逢ひに行く程圖々しくはなれなかつた。

その三月に再び間に立つ人——その人は川路と云つた——に鶴の家に行つて戴いて、求婚して戴いた。今度はこつちの名を云つた。さうして結婚するのは何時まで待つてもいいと云つた。自分は鶴を戀してゐた。さうして女に餓

ゑてゐた自分は一日も早く鶴とせめて許嫁^{いざな}になりたかつた。その上にその春鶴は學校を卒業するやうに聞いてゐたから。

しかし鶴はその春、まだ學校を卒業しないのださうだ。さうして兄が結婚するまではさう云ふ話を聞くのさへいやだと云ふ先方の答へだつたと聞いた。その後一度、偶然に甲武電車で逢つた。それは四月四日だつた。その後鶴には逢はない。

其後鶴の話はそのまゝになつてゐる。自分には望みがあるやうにもないやうにも思へる。

自分と鶴の關係はあらまし以上のやうなものだ。

自分はまだ、所謂女を知らない。

夢の中で女の裸を見ることがある。しかしその女は純粹の女ではなく中性である。

自分は今年二十六歳である。

自分は女に餓ゑてゐる。

* * *

自分はこの餓を鶴が十二分に癒してくれることを信じて疑はない。だから一年近く鶴に逢はないでも鶴を戀してゐる。逢はない爲にか鶴は益々自分の理想の女に近づいてきた。

だから今の處、この話のきまるまでは何年たゝうとも他

の女と夫婦にならうとは思はない。

しかし自分は女に餓えてゐる。鶴以外の若い美しい女は瞬間的に可なりつよく自分をひきつける。又年増の女でも、さう美しくない人でも或瞬間には可なりの力を以て自分をひきつける。

自然は男と女をつくつた。互に惹きつけるやうにつくつた。之がために自分は淋しく思ふことも、苦しく思ふこともある。しかし自分は自然が男と女をつくつたことを感謝する。互に強くひきつける力を感謝する。もし地上に女がなかつたら、愛し得るものがなかつたら、戀し得るものがなかつたら、さうして我利／＼亡者許りが集つてゐたら、いかに淋しいであらう。

女によつて墮落する人もある。しかし女あつて生きられる人が何人あるか知れない。女あつて生れた甲斐を知つた人が何人あるか知れない。女そのものはつまらぬものかも知れない。(男の如く、否それ以上に。)しかし男と女の間には何かある。

誠に女は男にとつて「永遠の偶像」である。

「アダム」は「イブ」によつて樂園から逐ひ出されたかも知れない。しかし一人で樂園に居るよりはイブと共に樂園を逐ひ出された方がアダムにとつて幸福だつたかも知れない。

女そのものは知らない、しかし女の男に與へる力は知つてゐる。女そのものは力のないものかも知れない。しかし女の男に與へる力は強い。

所謂女を知らないせいか、自分は理想の女を崇拜する。その肉と心を崇拜する。さうしてその理想的の女として自分の知れる範圍に於て鶴は第一の人である。

鶴に幸あれ!

しかし自分はいくら女に餓えてゐるからと云つて、いくら鶴を戀してゐるからと云つて、自分の仕事をすてゝまで鶴を得ようとは思はない。自分は鶴以上に自我を愛してゐる。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得ようとは思はない。三度の飯を二度にへらしても如何なる陋屋に住まうとも、鶴と夫婦になりたい。しかし自我を犠牲にしてまで鶴と一緒にならうとは思はない。

女に餓えて女の力を知り、女の力を知つて、自我の力を自分は知ることが出来た。

しかし女の柔かき圓味ある身體。優しき心。なまめかしき香。人の心をとかす心。あゝ女と舞踏がしたい、全身全心を以て。いぢけない前に春が来てくれないと困る。

自分は自我を發展させる爲にも鶴を要求するものである。

二

自家に歸ると晝飯だつた。

晝飯と一緒に食ふのは母と自分と今年四つになつた姪とである。父は毎日會社に出てゐる、兄と義姉は會社の用で外國に行つてゐる。

姪は祖母ちゃん／＼で一日くらししてゐる。母は春ちゃん／＼（姪の名）で一日くらししてゐる。父が歸れば父の用があるが、父も孫で夢中だ。

自分も春ちゃんが好きだが、春ちゃんも自分のことを叔父さん／＼と云つて懐つ／＼が、とても春ちゃんで夢中になることは出来ない。自分で自分だけが愛するものなしに生きてゐるのである。

晝飯の時春ちゃんで賑かだ。何度母や自分は笑つたか知れない。實際見てゐると可愛い。我儘云つておれる時や、泣く時は五月蠅が機嫌のいい時は可愛い。しかし笑ふ時も母程夢中にはなれない。他人の子ども可愛い／＼が、姪の方が遙かに可愛い。しかし自分の子供はもつと可愛い／＼だらう。

自分は春ちゃんを可愛く思ふが、思ひやうがあつさりしてゐる。さうして時々、母殊に父が夢中になつてゐると淡い反感を起す。併しもし自分の子供だつたら、自分も夢中

になるであらう。子供を通して自分の妻もよせて四人が夢中になるであらう。

晝飯は相變らずすぎた。自分は自分の室に歸つた。飯食つてゐる時はまだよかつたが、室に歸つたら淋しい氣がした。久しく逢はない、鶴に逢ひたいと思つた。しかし逢ふのがきまりがわるい、逢つたつて淋しい感じを抱くだけだ。結婚については彼女には少しも力のないことを自分は信じてゐる。

しかし逢ひたい、どうかはつてゐるか知らんと思ふ。

その時自分は今日は金曜日だと云ふ事に氣がついた。自分では中々迷信家だ、人智を信じない自分は運命を信じたくなる。運命に頼り切れるほどには信じてゐないが可なり信じてゐる。従つて可なりの迷信家だ。打ち消しながら信じてゐる。少くも氣にかゝる。

金曜日は西洋人が忌むと自分は聞いてゐる。それで二三年前から彼女に逢ひたい時でも金曜日だとなるべく逢ひに出かけないやうにしてゐる。しかしそんな迷信は悪いと思つて反つて出かけることもある。しかし一寸遠くに行かなければならない。従つて金曜日にわざ／＼出かけるのはいやだ。しかしそれは迷信だ。迷信はよくないと思つて出かけた事もある。さう云ふ時は逢はないと反つていゝなと思ふ

ことさへある。

まして一年近く逢はない鶴に逢ふのに、わざわざ金曜日に行くのはいやだなと思つた。しかし逢ひたい。

この時、折角今迄逢はなかつたのだから逢はない方が、甘くいつた時にも、まづくいつた時にもいゝと思つた。さうしてとう／＼逢ひにゆくのをやめた。

幸あれ！

自分は何か讀まうと思つてムンチの本をとつて見たがどうも讀む氣になれない。さうして淋しい氣がした。

自分はどうもたゞの空想家らしく思へていけない。何事も出來ず。これはと云ふ面白くもせず。さうして天災で若死するやうな氣がする。これも空想だらうと思ふが、自分は雷か、隕石にうたれて死ぬやうな氣がする。

さもなくば肺病になつて若死するかも知れない氣がする。どうも自分はなが生しないやうな氣がする。しかしさうかと思ふとなが生出來さうな氣もする。中々死にさうもないと思ふ。しかし天災、中でも雷と隕石があふない。

自分は之からの人間だ、大器晩成の人間だ。さう思はないではゐられない人間だ。それが今死んではたまらないと思ふ。しかしいくらたまらないでも死ぬ時が來れば死ぬ。したいことのない人はいゝ、したいことの多い自分は死ぬのがいやだ。

何しろ自分は戀も味ふことが出來ず、これはと云ふ仕事も出來ず。父たる喜びも知らず、減びてゆくやうな氣がしていけない。

自分はその淋しさをまぎらす爲に外に出た。

うつとしい曇つた天氣だつた。自分は色彩に乏しい陰氣な町を目的もなく淋しい陰氣な心持で歩いた。泣きたくつて泣けないやうな天氣は自分の心持に似てゐる。しかし歩いてゐる内に淋しくなつて涙ぐんで來た。かうなると自分の人格が一段と高くなつたやうな氣がする。さうして道ゆく人より自分の方が一段と偉いやうな氣がする。すべての人を憐み、すべての人に同情するやうになる。

「なんの爲に貴方達は生きてゐるのですか。

國の爲ですか、家の爲ですか、親のためですか、夫の爲ですか、子の爲ですか、自己の爲ですか。

愛するものゝ爲ですか。愛するものを持つてゐるでゝすか」

自分はかう心に云つた。

三

翌三十日の祭日は土曜だつた。この日大久保の友の家で同窓會があつた。晝頃迄雨がしと／＼と降つてゐたが午後一時頃自分が自家を出て大久保の友の處へ出かけた頃には

殆んど傘もいらない程の小降りだつた。自分は傘をさしたり、つばめたりして四谷まで歩いて甲武電車にのつた。

大久保には鶴が住んでゐる。鶴の家は何處だか知らないが、友の家と百番地ぐらゐはなれた處に住んでゐる。

自分は減多に大久保の友を訪はないが、鶴が大久保に引越してからは大久保の友の處へゆく時は鶴のことを思はない時はない、電車で一緒になりはしないかと思つて見たり、途中で逢ひはしないかと思つて見たりする。

可なり待つて電車に乗つたが鶴らしい人はゐなかつた。

大久保でおきて友の處へゆく途中の路のわるいにおどろいた。可なり齒の高い高下駄の齒が没してしまふ處さへあつた。それから見れば市中の道はわるいと思つても知れたものである。

自分はこのわるい道を鶴が毎日學校へ行く時に通つてゐるのだと思つた。この時自分は一昨年のくれに鶴にあつたことを思ひ出した。

「走^かけて御覽なさい」

と口の中で云つて、微笑んだ。

一昨年のくれに自分が鶴に逢ひたくつて逢ひに出かけた時だつた、自分は鶴の學校の前までゆくのはいやだから大概時間を計つて途中で逢ひに行つて或處までゆくと右に曲つてしまふ。その時その曲り近く來たが鶴の姿は見えな

かつた。三十間程でまがる所に來た時、曲り角で四人許りの女學生が立ちどまつて後ろを見てゐた。

すると向うから一生懸命に走^かけてくる人があつた。

鶴ぢやないかと自分は思つた。かう思ふのは珍らしいことではない。同じ年恰好の女學生、或は女の人の遠くから來るのを見る時、或は後姿を見る時、いつでも、どんな所でも鶴ぢやないかと思ふ。段々さう思つて見てゐるとさう見える。さうして十が十までちがふ。そのくせこりずにさう思ふ。

しかしこの時、向うから走^かけて來たのは鶴だつた。高下駄をはいて夢中で走^かけて來た。その日は天氣がよかつた、さうして道もよかつた、立ちどまつてゐる人は皆駒下駄だつた。

鶴は眞赤な顔して走^かけて來てとまつた、さうして四人におじぎして

「お待ちどうさま」と云つた。この時、自分は鶴と三間とははなれて居なかつた。自分は一寸鶴の方を見て右に折れようとした。

すると鶴が何か云つた。すると皆が

「あまりお走^かけになるからよ」と云ふのが聞えた。その時自分はもうふり向いて居た。その時鶴は高下駄の齒を一つおとしたのをひろはうとしてゐた。

その時自分は鶴と顔を見合せたと思つた。自分は夢中で三十間許り歩いた。さうしてふり向いた時にはもう誰れもゐなかつた。

この時大久保は道のわるい所だと思つた。それが今になつて思ひあたつたのだ。

走けて御覽なさいと云つたのは鶴が自分の妻になつて一緒に高下駄をはいて歩く時に押搦ふ言葉なのだ。永遠に押搦ひ得る時は来ないかも知れない。しかし空想ではいくらでも押搦へる。

自分が友の處へ行つた時は既に四五人の人が来てゐた。その内に段々来て十五人程になつた。中には三四年ぶりに逢つた人もあつた。もう陸軍中尉で陸軍大學に入つてゐる人もある。學士になつてゐる人もある。妻をもつてゐる人、子供を持つてゐる人もある。

しかし皆集れば六七年前の昔に歸る。皆は六七年前の友である。六七年前の心になり得ない人は互に面白く夢中になることは出来ない。

自分が友の處へ行つたのは一時半頃だつた。それから十時半過ぎまでいろ／＼のことをして面白く遊んだ。遊んでゐる時には皆六七年前に歸つた。しかし雑談のさいには齡は争はれないものだ。

もう五六人集つて、藝者の話に頻りに興味を持つて話し

てゐるかたまりもあつた。その内には今迄そんな話をするこの大嫌ひな人まで入つてゐた。彼等も女に餓えてゐるのだなと思つた。しかし圖々しく馬鹿に興味を持つてゐることを顔に顯はして話をしてゐるのが不快であつた。自分はその話をぬすみ聞きするのが不快であつた。しかし時聞えることを聞えなくすることは出来なかつた。誰とかが藝者に惚れられたとか、惚れたとか。デパートメントストアとか云ふ言葉がちら／＼と耳に入つた。

自分がかう云ふ話を聞いてはいくら女に餓えても藝者遊びは斷じてしないでよさうと思ふ。さうして美しい女と夜をたのしむ人を浦山しいとは思へなかつた。

この前の同窓會の時にも誰が細君をもらつたとか、今に誰かもらふとか、賣約濟だとか、豫約濟だとか云ふ話に花がさいた。今日は誰が父さんになつたとか、嘲笑的に云つてゐる人があつた。

道學者の自分にはかう云ふ性の問題を嚴談にされるのは不快でいけない、嚴肅な問題を座を賑かにする爲につかはれては困る。

さうして自分は女に對する考、結婚に對する考と人々の考の間に非常に違ひがあるやうに思へて仕方がない。夢中で遊んでゐる時はいいが、雑談の時、皆の口から出る言葉は自分に今後會へなくなると宣言してゐるやうにさへ思へ

ることがあつた。

彼等はロダンの接吻を見て氣味のわるい笑ひ方をする男にちがひない。

しかし大體から云ふと今日の同窓會は大成功だつた。他の同窓會のやうに酔ばらふ人は一人もゐない、顔をほんのりと赤くした人さへゐない。彼等のやうな興味の人間に酔ばらはれてはたまらない。

十時過に皆、聲をからして、笑ひすぎて、食ひすぎて、運動しすぎて歸路についた。皆面白かつたと云つた。こんな子供らしい樂は外では味へないと云つた。

電車で四谷までくる間は連があつた。それからわかれて獨り歸つた。雨はもう少しも降つてゐないが、あたりに「もや」がかゝつてゐて、空には雲がかさなつてゐた。その雲がいやにどす黒くつてふちの灰色とでなほすぐく見える。雲の足は早く、十七夜の月が時々すぐく顔を出す。

自分は寢靜まつた所々瓦斯燈のついてゐる町の内をこんなことを考へて歸つた。

自分かもし鶴と結婚が出来たら、同窓會に行つたら、きつと嘲笑する人があるだらう。自分は嘲笑に報ゆるのに眞面目な怒を以てするから自分を揶揄てやぶふことは眞の意味に於て自分と喧嘩することであるから、誰も自分には嘲笑をしない。随分されてもいゝことがあるやうな氣がするがされ

ない。

しかし鶴と結婚が出来れば随分いゝ話のたねになるから、さう云ふ話に馬鹿に興味をもつ人はつい自分を揶揄てやぶふかもしれない。

その時自分はかう答へる。

「え、見初めて結婚したのです。残念ながら眞の戀を幾分か知つた僕には貴方のやうに多くの女に興味を持つことは出来ません。何んでもござれとはゆきません」

かう云つて自分は苦蟲くるむしをつぶしたやうな顔をするだらう。さうして座はそれが爲に白らけるであらう。しかし自分にはまださう云ふ時に超越することは出来ない。

このことを超越することが出来れば自分はもう道學者ぢやない、教育家でもない、さうしてもしその時皆が黙つてゐたら自分は話頭をかへるであらう。しかしなほ自分を嘲笑する人があつたら、自分は黙つて歸るにちがひないと思つた。かう思つた時自分は微笑んだ。

十一時半頃自家に歸つて、すぐつめた寢床に入つた。

四

二月一日の晩に中野の友が來た。

この人は自分の今の戀を知つてゐる。今大學の文科に通つてゐて、自分と學習院の時同窓だつた人だ。三十日の同

窓會にも來て居た。

いろ／＼話をしたが、自分に忘れられない印象を與へた言葉は

「美しい女の人で電車にのつて學校に通つてゐる人はすぐ評判になるらしいね」と云ふ言葉であつた。自分は「さうだらう。皆美しい女に餓えてゐるからね」と云つた。

さうして鶴も評判されてゐるだらうと思つた。鶴は大久保から電車で學校に通つてゐる。

友は評判されてゐる二三の女について人から聞いたことを話した。

自分はその女を知らない。だから評判されても別に何んとも思はない。しかし鶴が評判されては困る。女は玩弄物のやうに思つてゐる人々の口の端にのぼるのはいやだ。鶴は華美な女ではない。さうして粗末な着物を無雜作に着て居る（少くも去年迄は）一寸人目にはつかない女だ。しかし美しい、なんと云つても。どんな風しても美しい。さうして可憐だ。男をひきつける所がある。マリアのやうな顔の形。ピーナスのやうな目。

餓ゑたる男の目をのがれることの出来ない女である。鶴はもう少數の人には評判されてゐるにちがひないと思ふ。

このことは神聖なるものを穢されたやうな氣がする。鶴を戀し得る資格のある人は自分一人でありたい。鶴の個性

はたゞ自分の個性とのみ夫婦になり得るやうに自分は五年前からどうしてか迷信してゐるのだ。されば自然は自分をして鶴を話することもなくして強く戀し得るやうにさせたのだと思つてゐるのだ。

鶴を戀してゐる人はゐないかも知れない。しかしさう考へ得る程には自分は目出度くない。

鶴を戀してゐる人があるとする。その人の性格が氣にかかる。もし眞に鶴を戀して居る眞面目な人があるならば、自分が幸福の時にその人を不幸におとさなければならぬ。さうしてもし鶴がその人に心があつて、さうして親の命令で自分の處へくるならば鶴にも氣の毒である。自分は平然として鶴と結婚することは出来ない。

自分は自分の快樂の爲に他人を不幸にしようとは思はない。自分の戀の爲に他人の戀を犠牲にしたくはない。まして自分の戀してゐる女の不幸を喜ばない。鶴が自分を愛してゐてくれると思へばこそ、自分の處へくるのが鶴の爲になると思へばこそ、自分は父や母に無理に承知させてまで求婚したのだ。しかしもし自分の處へ来るのを喜ばず、他の人の處——その人は自分より遙かに有望な人で立派な人で身體の丈夫な人であるとする——へ嫁きたく思つてゐるならば自分の求婚は考へものである。

自分から求婚されなかつたら、もつと幸福だつたらうと

思ひながら鶴が自分の處へ來ては困る。

自分は自分の處へ來ることを一番幸福だと感じてくれる人でなければ、此方からお斷りしたい。自分は生れつきの道學者である。

さうして自分は極端の個人主義者である。

自分を他人の爲に少しでも犠牲にすることを喜ばない自分は、他人を自分の爲に少しでも犠牲にすることを恥とする。

ましてや、愛する故を以て愛するものゝ自由を束縛し意志を束縛するものを心から憎む自分は極端にまで自分の爲に戀人を不幸にさせたくない。

しかし自分は鶴が他の男を戀してゐると云ふことを知らないのだ。自分を戀してゐてくれると云ふことも大なる疑問であるが、それ以上に鶴が他の男を戀してゐると云ふことは自分にとつて疑問である。

さうして自惚のつよい自分にとつて自分以上の人格者が鶴を戀してゐると云ふことは大なる疑問である。

こゝで問題は裏返しになる。もしかしたら自分が押つよく求婚しないために彼女は他の外面的には遙かに自分よりよき人の所へ嫁よめさないと限らない。さうしてそれが爲に自分の處へ來た程生の快樂と有難味を知らずに死ぬかも知れない。

かう思ふと自分は鶴の爲に戦ふ時が來たやうな氣さへする。しかし鶴とは一年近く逢はないのだ。自分は鶴と話したことはないのだ。自分は大に鶴の心と自分の心とはもう三四年前から他人ではないと云ふことを信じてゐる。しかし勝手に信じてゐるのだ。二三年前からマーテルリンクを愛讀するやうになつてからはさう云ふやうに思へるやうになつた。

口ではうそがつける。耳にはうそがつける。しかし眞心はうそをつかない。眞心にはうそはつけない。自分はさう信じてゐる。しかし疑問が入る隙間もない頃には信じてゐない。かう云ふことを自分は中野の友と外の話をしながら、沈黙するとはきれ／＼に思つた。

さうして中野の友が十一時近くに電車がなくなるといけないからと云つて歸つたあと、すぐ自分は自分に多大の同情をよせてくださつて、鶴と自分を夫婦にする爲に奔走してくださつた、さうして之からも一生懸命に奔走しようと云つて下さつた、川路氏に手紙をかいた。

手紙の前置を書いてゐる内に自分は自分の鶴に對する態度の傲慢なのに氣がついた。

自分は女に餓えてゐるので今迄はなるべく早く夫婦になれなければせめて許嫁になりたく思つてゐた。しかし考へて見れば鶴はまだやつと十八歳になつた許りである——自